



ROOTS

Alex Haley

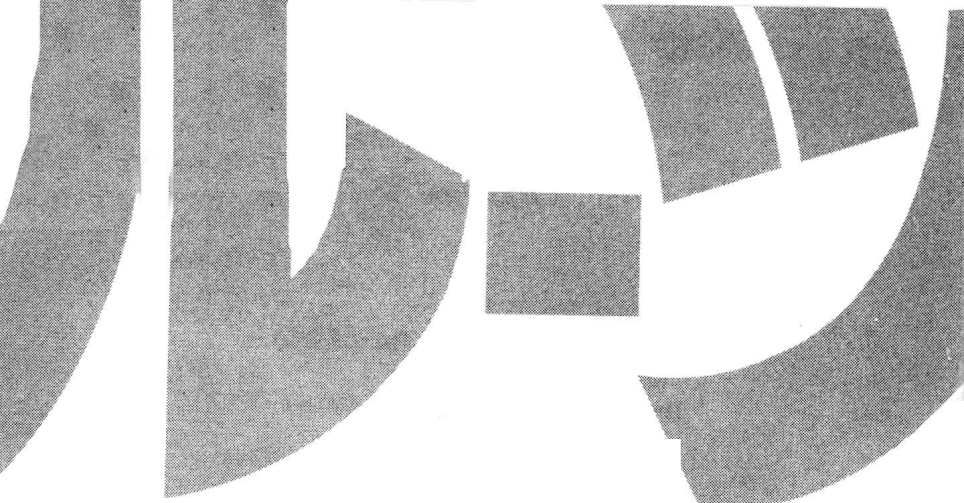
アレックス・ヘイリー

安岡章太郎

松田銑

共訳





ROOTS

Alex Haley

アレックス・ヘイリー

安岡章太郎

松田銑

共訳



ルーツ 下

一九七七年一〇月三〇日 初版第一刷発行

一九七七年一月二〇日 初版第四刷発行

著 者 アレックス・ヘイリー

訳 者 安岡章太郎・松田銃

装幀者 平野甲賀

発行者 小森田一記

発行所 株式会社社会思想社

東京都文京区本郷一ノ二五ノ二二（〒一三三）

電話東京八一三・八一〇一

振替東京六一七一八二二

王子製紙・凸版印刷・黒田製本

©1977 0097-60080-3033

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取替いたします



日本の読者へ

アレックス・ヘイリー

かつて二十年の間、わたしは水兵として船に乗っていた。事実、わたしが初めて小説を書こうと試みたのも、その海上にいた頃のことである——そして今日、わたしのいちばん好む執筆の場所は貨物船の上である、ただし今は普通の旅客としての旅であるが。そのため、わたしは今まで、日本の港は数知れぬほど度たび訪れているし、普通その時には鉄道で国内を旅して見てもいる。

かの有名な新幹線の列車の窓から外を眺めながら、わたしは、人々の家や、畑や、小さな庭までも、信じられないほどきちんと整頓されているのを見て、次つぎに目の前を流れて行くパノラマをきながら名画のように嘆賞した。都市に着くと、会社や商店が、またそれに劣らぬほどすばらしい能率ぶりを發揮しているのも見た。そうして日本を訪れるたびに、わたしは、わずか、この三十年の間に日本が劇的に、世界の注目と尊敬とを受ける立場にのしあがった理由についていよいよ納得がいくように感じたのである。

そして二つの特別な理由があつて、わたし自身の日本人に

対する尊敬がますます深まってきた。一つは、日本の人々がいつ、どんなにして、誰に会おうと、お互に對して実に礼儀正しいのを目にしたからである。しかしそのなかでも、何よりもわたしにとって印象的であつたのは、日本では老人に對して特に深い敬意が払われるのをはつきりと見たことである。全体として日本では、非常に古い文化がよく尊重され、ていねいに保存されていることもわたしは知つた。そしてわたしの近づきになつた友人たちは、日本でどんなに民族の誇りが強く意識されているか、家族がどんなに緊密に構成され、どんなに神聖なものとされているか、伝統的な文化がどんなにして幾世代を通じて継承されているかをもっと詳しくわたしに話してくれた。

つい近頃のことであるが、わたしは、アメリカ生まれの日系市民の経験を聞かされて悲しく思つた。この本を読んで、自分の家のルーツを探らずにいられなくなつた、その人たちが日本へ飛行機で飛んで行つた。彼等は日本人を見た。そして彼等も日本人の血を承けた人たちであつた。しかし彼等が

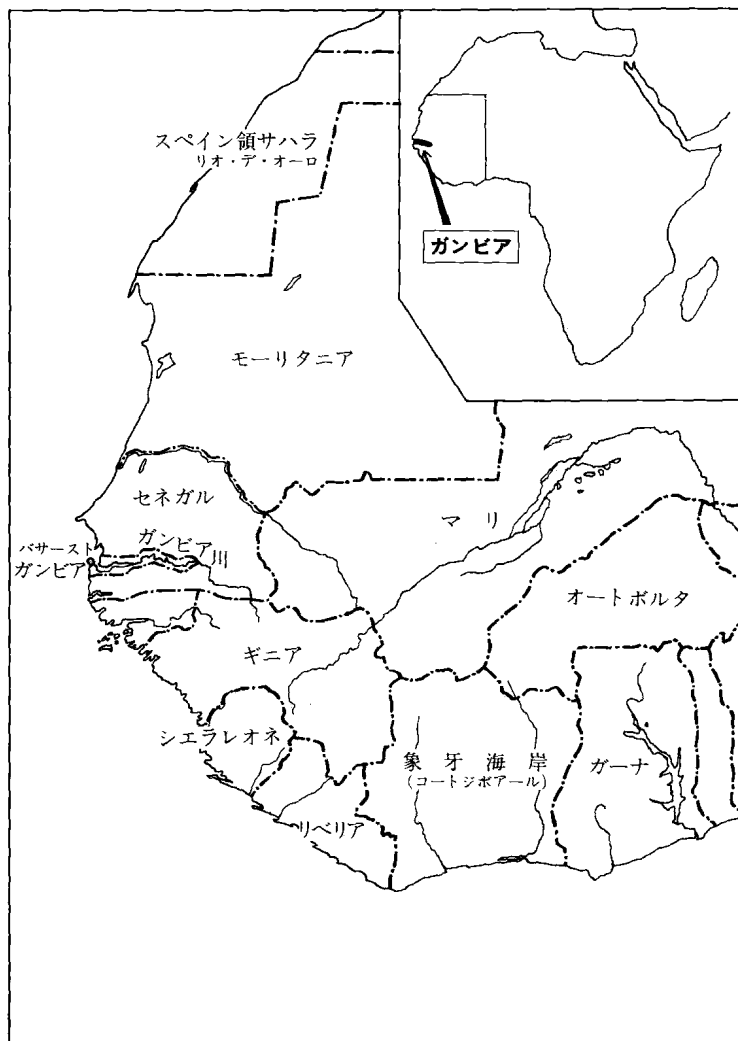
後に語ったところでは、その先祖の国で、彼等は四六時中、何かにつけて、「本当の」日本人でないことをしめじみと思ひ知らされたものである。それは多くのアメリカの黒人がアフリカを訪れて帰ってからの感想とまったく同じであった。

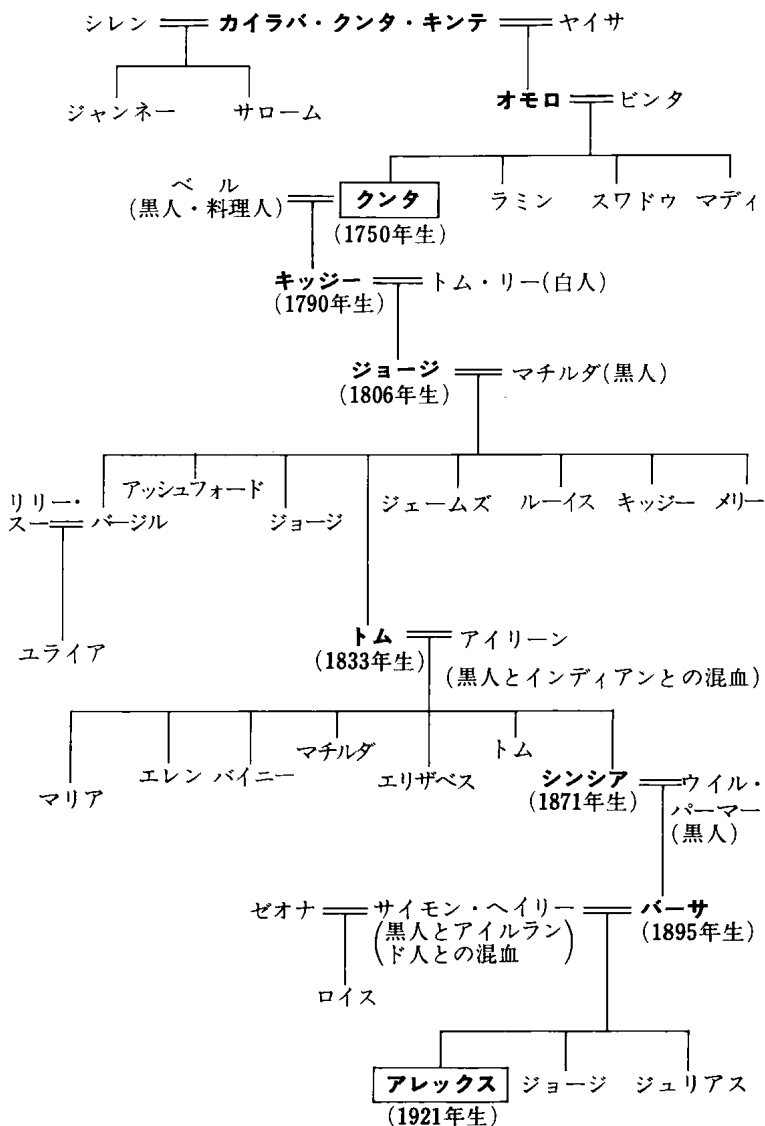
今日普遍的に見られる人間の実情は、わたしたち人間が余りにも相違を強調しすぎて、わたしたちが誰であろうと、どこに住んでいようと、わたしたちはこの地球という惑星と一緒に住んでいるということを無視するようになってしまったことではあるまいか。わたしはそういうふうに感じるのである。

この本の中で、祖母のヤイサの死を嘆き悲しむ幼いクンタ・キンテに起こったことのなかにある意味がこめられているのだが、それを著者のわたしと共に重んじて頂けるだろうか。「クンタよ」とクンタの父のオモロは言った、「お前に教えておかなければならないが、どこの村にも実際に三つの種類の人々が住んでいるのだ。第一にお前のおばあさんのように先祖の仲間に入り、これから先も先祖と共にいる人々だ。第二に、お前やわしのように、幸いにこうして村の中を歩きまわり、話し合うことを許されている人々だ。そして三番目には、これから生まれて来て、お前やわしが年寄り、先祖の仲間に入る時、その後を継ぐ人々なのだ」

二世紀ばかり前、アフリカの小さな、名も知られぬような村でオモロが息子のクンタに告げたことは、今日、東京や、ロサンゼルスや、ストックホルムや、ブエノスアイレスや、北京や、モスクワのような、わたしたちの世界の村でも、それと少しも違わず真実なのである。わたしたちは、誰であろうと、どこに住んでいようと、わたしたちのために創造主の作り給うた宇宙の諸相の、ほんのただ一つの相の中にいるのである。

そこで、わたしたち、この世界に住む者は、たとい最悪の場合でも、お互の間で、お互に対する、より深い尊敬を探し求めねばならないのではあるまいか？ わたしの、この「ルーツ」という本は、アフリカの黒人と、その末裔の豊かな歴史と伝統とにせめてもう少しでも、光をあてようという試みである。彼等は、百万、千万をもつて数えられる人々であるが、しかしこの世界の男女の間の、肌の色、国籍、宗教、政見など無数の相違にもかかわらず、なお唯一つの相を現わすものにすぎない——わたしたちすべては必然的に同じ人類であるという相を。





ル
ー
ツ

下

69

「まあ、小さな、黒ん坊のお人形みたい！」と、アンお嬢ちゃん、三日後にベルの料理場で初めてキッジーを見たとき、夢中になって飛び跳ね、嬉しがって手をたたきながら、キッジー騒いだ。「この子、わたしのものにしていいの？」

ベルは、にこにこ嬉しそうな笑顔を見せていった。「そうだね、この子はあたしとパパのものだが、いまにすぐ大きくなったら、嬢ちゃんの好きなだけ一緒に遊んでいいよ」

そしてアンはそのとおりにした。近頃、クンタが、馬車の用事があるかどうか尋ねたり、あるいはちよつとベルの顔を見るために料理場へ寄るとたいいてい、亜麻色の髪をした当年四歳のだんなの小さい姪がキッジーの籠の中をのぞきこんで、赤ん坊をあやしているのを見かけた。「ほんとうにお前きれいなえ。すぐ大きくなって、一緒にうんと遊びましょうね。わかる？ 早く大きくおなり、さあ早く！」クンタはそれについては何にも言わなかったが、その白人の子供がキッジーをまるで珍しい人形か何かのように見なし、自分の玩具になるためにこの世に出て来たかのように振舞うのを見ると、

むかむかした。そもそもベルが自分に対して、男として、父親として敬意を払わず、わが娘が自分を買った男の娘と一緒に遊ぶのを夫がどう思うか、問題にもしないのはけしからんと彼は怒っていた。

ベルはどうもだんなの気持を考えるほど、亭主の気持を考えてくれないように、クンタは時どき思った。ベルは何かといえ、生まれるとすぐに母親と一緒に死んだウォラーだんなの妻の娘の身代りに、アンお嬢ちゃんが現われたのは本当に幸いだった、と寝物語に繰り返すのだが、いったい何回、同じ話を繰り返したか、クンタには数え切れなかった。

「ふんとにまあ、思い出すだけでもつれえことだ、」とベルは、ある夜も鼻をすすりながらクンタに話した。「プリシーラおくさんは、小鳥みてえに小せくて可愛らしかったよ。毎日ここをひとりで歌いながら歩きまわって、あたしを見ると、にこにこしながらお腹をなでて、赤ちゃんの生まれるのを待ってなされた。それがあの朝、さんざ苦しんで叫びながら、どうとう小せえ赤ちゃんと一緒に死んじまった。あれから、だんなの笑顔はあんまり見たことがなかったよ、あのアンお嬢ちゃんが生まれるまでは――」

クンタは、だんなが一人ぼっちだからといって別に気の毒とも思わなかったが、もう一度結婚すれば、だんなも忙しくなって、そうそう姪に溺れてもいられなくなるだろう、そう

すればきつとアンお嬢ちゃんの農園へ来る度数も減り、したがってアンお嬢ちゃんがキッジーと遊ぶことも少なくなるだろうにと思った。「あれから、あたしはいつも見てるがね、だんなはあの子を膝にのせて、ぎゅーと抱いて、話をしてやって、歌をうたって寝かせて、ベッドにもいれずに抱いてすわってなさる。あの子がここにいる間じゅう、目をはなしたくねえようだよ。そりゃあ、自分があの子の父親の気持ちになつてゐるからだよ。わたしやわかつてるんだよ」

アンお嬢ちゃんがキッジーと仲良しになつて、いままでよりも、もつと度たびだんなの家に来るようになって、だんなはそれでキッジーに対しては無論のこと、クンタとベルに對しても、いよいよ親切になるだけのことだと、ベルはクンタに言った。ジョンだんなと彼の病身の妻君にしても、自分たちの娘が伯父に特に近しくなるのを嫌うはずがない、「近しくなるほど、自分たちがだんなの金にも近しくなるとか上げえるから」とベルは抜目なく見通していた。だんなの弟がどんなにえらそうな恰好をしても、ベルは事実として、彼が時おりだんなから借金していることを知つていふといひ、クンタもいろいろ知らないことはないから、その説にはうなずいた——もつとも、それはクンタがどっちのトゥボブがどっちより金持かなどということに関心を持つてゐるからではなかつた。彼の目から見れば、トゥボブはどれもこれも同じだ

つた。

キッジーが生まれてからというもののクンタは、だんなが患者や知人の家へ行くのを乗せて走り廻りながら、ベルがよく口にする、だんながもう一度結婚してくれば、という願ひにつくづく同感を覚えることが多かった——もつともクンタがそう感じる理由はベルの場合とまったく違つていたけれども。「だんながこの大きな屋敷にたつた一人で住んでなさるのは、あたしにゃきのどくでならん。ほんとうのところ、だんながいつもあんたを使つて、馬車で道をほしりまわつてゐるのも家にやいたくねえからだと思ふよ。ひとりぼつんとここに坐つてゐるより、なんでも動きまわつてりゃいいのよ。なんとまあ、あのアンお嬢ちゃんまでそれがちゃんとわかるのよ！ この前ここへ来たとき、あたしやおひるごはんの給仕をしてたら、あの子が急に言うのよ、『ウイリヤムおじちゃん、おじちゃんはどうしてほかの人みたいにおくさんがないの』つて。そしたらまああきのどくに、だんなは返辭につまつてしまつたんだよ」

トゥボブのこととなるとベルが大変詮索好きになるのは心得ていたから、クンタは絶対に彼女には話さなかつたが、だんなに興味を示す女たちがいることを知つていた。クンタがだんなの馬車を先方の屋敷の車道に乗り入れると、そういう女はまるで転がりそうにしてだんなを迎えに走り出てくる。

いつまでたつてもよくならないで、だんなを呼びに来る患者が一人いたが、その屋敷の太っちょの黒人の料理女はいかに馬鹿にした口調でクンタに話した。「あのいやらしいあばずれ女は悪いとこなんぞありやしねえのに、おめえさんのだんなをひっかけようとしているんだよ、だから当分病氣はなおらねえよ。あの女は、前にもタチの悪い手で男をひとり墓へ送っちゃったが、こんどは仮病をつかって、おめえさんのだんなをここに引っぱりこんでるんだよ。あんたたちが帰ったあとのあの女を見せてえもんだ。わしたち黒ん坊をラバかなんぞのようになりつけて、あたり散らしてよ。あいつあ、だんなの置いてった薬にや手もつけねえよ」他にも、もう一人女の患者がいて、その女はだんなが診察を終えて帰るとき、まるでいまにも倒れそうなふうにだんなの片腕にすがりつき、肩をなよなよ動かし、だんなの顔を見上げながら、玄関へ送って出てくる。しかし、だんなはどちらの女にも、いつも生真面目な態度で接して、他の患者にくらべれば、ずっと早く診察を切り上げた。

そうして何か月もが過ぎていって、アンお嬢ちゃんはだいたい一週に二回ウオラーだんなのところへ連れて来られたが、そのたびに彼女は長い間キッジーと遊んで過ごした。クンタはそれをどうすることもできなかった。それで二人が一緒にいるところだけはなるだけ見ないように努めた。しかし二人

はクンタの行く先ぎきにいるようで、彼は自分の小さい娘がだんなの姪に撫でられたり、キッスされたりして、可愛いがられるのを見せつけられた。それを見るとクンタは、大昔の先祖から伝わったアフリカの諺を思い出し、厭な気がした。「一緒に遊んでいても、猫は結局鼠を食わずにはいない」

クンタがどうかそれ了我慢できたのは、アンがいつも来ているわけではなくて、他の日もあったからだ。キッジーが這いはじめた頃は夏になっていた。クンタとベルとは、毎夜小屋でキッジーがおしめをした小さいお尻をおつ立てて床の上を這いまわるのを嬉しがって眺めてすごした。しかし間もなくアンお嬢ちゃんがやってくる、キッジーを連れて行ってしまふ。アンお嬢ちゃんは、キッジーのまわりを、ふざけてぐるぐる廻りながら、「おいで、キッジー、おいで」と呼びかけ、キッジーは相手にしてもらって遊ぶのが嬉しくて、のどを鳴らしながら、一所懸命に這って後を追いかけた。それを見てベルはにこにこ顔だったが、夫のクンタが留守の間に、アンお嬢ちゃんが来たこと知っただけでも、その晩部屋に帰ってくるなり、しかめっ面をして、口をへの字に結び、一晩じゅう口もきかないであらうということは、よく知っていた。ベルはそうしたクンタが頼にきわってならなかったが、もしクンタがそういう気持をはっきりと表明するのではなくても、なにか態度に見せて、それがだんなに伝わるだけでも、

どんな大変なことが起こるかわからなかった。だから、クンタがそんなふうには振舞うたびに、ベルは少し怖くなるのだった。

ベルはクンタをつかまえて、彼さえ我慢すれば、子供同士のそういう関係から難儀が起こることはあり得ないと言うつもりで、こんな話をした、白人の娘たちが幼馴染の黒人の子と、大人になっても一生変らぬ友情を持ち、心からつくし合う仲になることがあるのだ、と――。

「あんたが、だんなの馬車の御者になる前のことだけれど、うちのだんなのおくさんとおんなじように、子供を一人のこして死んでしまった白人の奥さんがいた。だけど、その女の子は生きのこって、ちょうど同じ年頃の女の子を持った黒ん坊の乳母にそだてられたのよ。二人の女の子はまるきりきょうでえのように育ったけど、そのだんなが新しいおくさんと結婚したの。その二度目のおくさんは、二人の女の子が仲良くするのをいやがって、とうとうだんなを承知させて、黒ん坊の娘と母親と両方とも売っ払っちゃったのよ……」ところが、その親子がいなくなると、白人の娘はしょっちゅうヒステリーを起こしたので、ウォラーだんなが何度も何度も診察に呼ばれた。そしてあげくの果てに、ウォラーだんなは、その子の父親に、黒人の女の子を連れ戻さないと、娘さんは悲しんで弱り果て、死ぬかもしれないと告げた。「そのだん

なは、すんでのことに、新しいおくさんを鞭でたたくところじゃった。だんなはすぐ馬を飛ばして出掛けると、どのくらい大金を使ったかしらんが、その親子を売った奴隷商人を見つけたして、新しいだんなから二人を買いもどしたんだよ。そのだんなは黒ん坊の子をつれてもどると、弁護士をよんで、証文をつくらせて、その子を自分の娘の財産にしてしまった」そんなことがあっても何年にもなるが、その白人の娘は大人になったいまでも、まだ完全に丈夫な身体には返っていないとベルは話した。「その黒ん坊の娘は白人の娘と、いまでも一緒に住んで、そのせわをしてるけれど、二人ともとうとう嫁には行かないだ」

クンタに言わせれば、ベルのその話は、黒人と白人とが親友になることを弁護するためではなくて、それに反対するための教訓になると思った。それだったら、これ以上有力な例はあまり見つからないだろうから。

70

たぶんキッジーの生まれた頃から、クンタとバイオリン弾きとは、時どき「ハイチ」という海の向うの島のことをきいてきて、それを農園の皆に伝えるようになった。噂によると、その島には、ほとんどがフランス系の白人が三万六千人ばかりいるが、それに対して黒人は、ずっと多くて五十万人もいる。黒人たちは、砂糖きびやコーヒーや藍やココアを栽培するベラ棒に大きな農園の奴隷として使うために、アフリカから船で連れて来られたのである。ある晩、ベルが、ウォラーだんなが晩飯の客に話しているのを聞いて、こんな噂を伝えた――。ハイチの裕福な白人階級は王様のような生活をしているが、一方自分の奴隷も持てない多数の貧乏な白人を馬鹿にして、冷遇しているという。

「何てえこった！ そんなこたあ、おいらたち聞いたこともねえな、おい？」とバイオリン弾きが皮肉に言った。

「しっ！」とベルが思わず笑い出しながら制して、話をつづけた。だんなは、それから怯え上がっている客たちに、ハイチでは何代かにわたって、白人の男と奴隷の女との間で混血

がおこなわれたため、現在二万八千人近くのムラート（白人の一代混血児で、特に肌の色が淡褐色の者）とハイ・ヨラーとがいて、一般に「有色人種」と呼ばれるが、そのほとんどがフランス人の主人兼父親から自由を与えられているのだ、と言つてきかせる、客の中の一人が、この「有色人種」たちは、みな様に自分たちより肌の色の薄い相手を探すが、彼等の最終的な目標は完全に白い肌の子供を作ること、はつきりムラートと見てわかるような連中は役人に賄賂を使つて、自分たちの先祖がインディオか、スペイン人か、とにかくアフリカ人以外の人種だという証明書を書かせるそうだと応じた。ウォラーだんなは、まったく驚くべきことで信じられないし、またまことに嘆かわしいことだがと前置きして、多くの白人の贈与や遺言によつて、相当多数の「有色人種」どもが、少なくともハイチの土地の五分の一と、それに属する奴隷とを所有するようになった、そのため彼等は休暇にフランスに遊びに行つたり、金持の白人がするように子供を学校にやり、はなはだしきは貧乏白人を馬鹿にしたりする、と話した。それを聞いた連中は、けしからんといきり立つたが、ベルにその話をきいた黒人たちは、それは愉快と大喜びだった。

そのときバイオリン弾きが話に割つて入った、「おめえたち、おいらが、ちょっと前に呼ばれた白ん坊の舞踏会で、金持のだんなが話していたことをきかせてやろう。こいつ

「あ笑うどころじゃねえぜ」そのどんな方は、みな我が意を得たりとうなずきながら、ハイチの貧乏白人たちが、黒白血のムラートやハイ・ヨーラーをひどく憎んで、連名で請願書を送ったので、フランスはついに法律を通過させ、「有色人種」の夜間外出や、教会での白人との同席や、また白人と同種類の布の衣服の着用すら禁止したというのである。一方、白人も混血の「有色人種」も揃って、ハイチの五十万人の黒人奴隷に向けてうつぶんばらしをしているのだと、バイオリン弾きは言った。またクンタが町で、白人たちが高笑いしながら話しているのをきくと、ハイチの奴隷たちはこよりもひどく苦しめられているようだった。何でもあちらでは、黒人が罰として殴り殺されたり、生き埋めにされたりするのは日常茶飯のことで、妊娠している黒人の女は、流産するまでこきつかわれることが多いという。クンタは、こんな話をしても皆を怖がらせるだけだと思ったから黙っていたが、それよりもっと人間の仕業とも思えない残虐なことも聞いていた。たとえば、黒人の両手を壁に針付けにしておいて、両耳を切り取り、それをむりやりに口に押しこんで食べさせたとか、ある白人の女が自分の奴隷の舌を残らず切り取らせたとか、別のトゥボブの女は黒人の子供にさるぐつわをはめて餓死させたとかいのであった。

これまで九か月か十か月の間そんな身の毛もよだつ話ばかり

り聞かされたあげくだったからクンタは、この一七九一年の夏、ハイチの黒人奴隷がはげしい血みどろの反乱を起こしたというのを、町で聞かされても、別に驚きはしなかった。何千、何万という奴隷が押し寄せて、白人の男を虐殺し、棍棒で殴り殺し、その首をはね、子供のはらわたを抜き、女を強姦し、ありとあらゆる農園の建物を焼いたので、北部ハイチは灰燼に帰した。

裸え上がった逃げ出した白人住民は、命がけで戦い、反撃して、捕えた黒人は一人残らず拷問にかけて殺し、その皮を剥ぐことまでしているが、しかし物凄い勢いで拡がる黒人の反乱の前では、みるみる人数が減って、ほんのひと握りの生き残りだけになり、ついに八月の末には、わずか数千人の白人が辛くも生き延びて、身を隠し、島から逃げ出そうとしていた。

クンタは、スポッチルベニアのトゥボブがこんなに憤慨し、こんなに恐れているのを見たのは、初めてだと言った。

「この前バージニアでおこった一揆のときより、もっと怖がつとるようだな」とバイオリン弾きが相槌を打った。「たぶん、おめえが来て、二、三年してからのことだが、おめえはまだあの頃は、誰とも付き合ってなかったから知るめえがな、ありやあその年のクリスマス休みのあいだに、あのハノーバー郡のニューウエルズでおっぱじまったのよ。ひとりの監督

が若え黒ん坊をなぐりたおしたら、その黒ん坊がとびおきて、斧で監督をぶちかまそうとしたが、やりそこなった。するとほかの黒ん坊たちが監督にとびかかって、めちゃくちゃにたたきのめしたから、はじめの若え奴隷がわりこんで監督を助けてやった。監督は血まみれになって、助けをさがしに逃げた。そこで気の立った黒ん坊たちやあもう二人の白人の男をつかめえて、ふん縛ってぶん殴ってたんだ。そけえ大勢の白人坊どもが鉄砲を持って走ってきた。黒ん坊たちも納屋の中に陣どった。白人坊はうめえことを言つて、黒ん坊をおびき出そうとしたが、黒ん坊は桶板や棍棒をもつてとびだしてきて、けっきょく黒ん坊が二人、鉄砲でうたれて死んで、白人坊も黒ん坊も大勢怪我人も出しておしめえさ。連中は州兵のパトロールをくり出したり、法律をしいたり、そんなこんなで、やっと騒ぎは下火になったが、このごろのハイチの騒動で白人坊はまた思い出しとるんだよ。連中も、よく知つてやがるんだ、手前らの鼻っ先に黒ん坊がうようよしていて、何かいいきつかけせえありやあ、いまにも立ち上がるつてのはな。いったん騒ぎが起こつて、ひろがり出した日にゃ、それこそてえへんだ。このバージニアでもハイチとおんなじことにならあ」バイオリン弾きは、そう言いながら、明らかに悦に入つてた。

クンタは間もなく、白人たちの恐怖感を身をもつて知るよ

うになった。彼が馬車で町の中を走ると、四つ辻の店屋や、居酒屋や、教会の集会場や、その他いたるところで、白人たちが三人五人と集まつてはいきり立ち、クンタであらうと誰であらうと、とにかく黒人が通りかかるのを見ると、真っ赤な顔をして睨みつけるのだった。平生、行先を告げる他にはほとんど口をきかないだんなまでが、時たまいう言葉の調子がハッキリと冷たく、つつけんどんになった。それから一週間たたないうちに、スポッチルベニア郡の州兵が街道のパトロールをはじめた。黒人が通行しているのを見つけると、行先を問いただして旅行許可書を検査し、挙動不審と見ると片っ端からぶん殴つて、牢へほうり込んだ。地域のだんなの集会で、間近に迫つた年に一度の奴隷たちの収穫祭りが取り消され、その他、それぞれの農園内を除いて黒人の会合もみな取りやめになった。農園内の奴隷長屋のダンスや礼拝の集まりにも監督か、他の白人の監視がつくことになった。「だんながあたしにそれを言いなさつたとき、あたしやだんなに、あたしとスーケイおばさんとマンディねえさんとは、日曜日と、それからほかの日も出るときにゃ、一緒にひぎまずいてイエスさまにお祈りしますと言つていたがね、だんなは見張りのことなんぞ言わなかつたよ。だからあたしらはいままどおりお祈りすることにしようよ」とベルは奴隷長屋の仲間告げた。

それから五、六日たって、或る晩、クンタとキッジーと親子三人だけで家にいるとき、ベルは最近のニュースを知ろうと数枚の新聞を苦心して読んだ。その新聞は、だんなが棄ててあったのを拾ったものだ。ベルは、小一時間もかかって一つの大きな記事をやっと読み終えた。「なんかケンリのショーンとかいうのが……」とクンタに言いかけて、そこでつまって、大きく息を一つ吸うと、「あのう、ひ、じ、ゆんとか、なんとかしたんだって」と言った。しかし、そんなことよりハイチの最近の事件についての報道がずっとたくさんのもっていた——そのほとんどは、二人が奴隷仲間で口づてに聞いていたものだったが——。要するに、ハイチの奴隷反乱の影響で、アメリカの黒人の不平分子の間にも無謀な考えが簡単に拡がりがかねない、それを防ぐには思い切った取締りときびしい罰を加えるべきだということが述べてあるのだと、ベルは説明した。ベルは新聞紙をたたくで片づけると、「あいつらがあたしたちを抑えつけようたって、みんな残らず鎖でしばりでもしないかぎり、たいしたことは何も出来っこないわよ」と言った。

しかし次の一、二か月の間に、ハイチの事件の報道はしだいに下火になり、それとともに南部全体を通じて少しずつ緊張がゆるみ、取締りもゆるめられた。収穫期がすでに始まっていて、白人たちはお互に綿花の豊作と、その記録破りの高

値を祝い合っていた。バイオリン弾きはあんまり方々の屋敷の舞踏会や宴会の演奏に呼び出されるので、昼間は家に帰ってただもう寝つづけに寝ていた。「だんな衆は綿で金がかろうかりすぎて、おどろ死ねつもりらしいぜ」と彼はクンタに話した。

しかし白人たちにとって、もう一つ気にさわるのが間もなく起こってきた。だんなを乗せて郡役場へ行くたびにクンタの耳に、北部ばかりか南部でも、「白人種に対する反逆者ども」の組織した「奴隷制度反対協会」の会員が増えていると、憤慨する声が聞こえだした。クンタは、そんなことがあるのだろうかとか大いに疑いながら、このことをベルに話すと、ベルはこの頃、だんなの新聞にも同じようなことが出ており、最近急にその協会が大きくなったのはハイチの黒人の反乱のせいだと書いてあると言った。

「いい白人もいると、いつもあんたに言ってきたじゃない」とベルは力を入れて言った。

「ほんとよ、白人のなかにゃ、あんたみてえなアフリカ人を乗せた奴隷船が来だしたときから、反対していた人が大勢いたんだってよ」そんなふうに言われるとクンタは、ベルにお前の祖父母はいったい何処から来たと思っているのだ、と訊きかえしてやりたい気もしたが、彼女があまりに興奮しているの、黙って聞き逃しておいた。ベルは話をつづけた。

「もちろん、そんなことが新聞に書いてあつたら、だんなはかんしゃく起こして、国賊だとかなんとかいうて、どなりちらすに決まつてるけどさ。だけれど、かんじんなことは、奴隷はなんてえの白人が、もつと自分の考えをどんどん言うことよ、そうすりゃだんな衆の間でも、腹ン中で自分たちが正しいかどうか気にする人が増えてくるよ」 彼女はクンタをじつと見詰めていった、「自分はクリスチャンだと言つてる人たちはなおさらのことよ」

彼女は、からかうようにクンタをもう一度見詰めた。「あんな、日曜日にあたしとスーケイおばさんとマンディねえさんとが何を話し合つてると思う？ だんなは、あたしたちが歌つてお祈りしてるだけだと思つてるけど、あたしは白人坊のすることをじつと見てるンだよ。たとえばあのクエーカーだけどき、あの人たちは独立前にも奴隷には反対してた。このバージニアでのことよ」 彼女は言葉をつづけた、「クエーカーの中には、もとは黒ん坊を大勢持っただんながたくさんいた。だけどクエーカーの牧師さんが、黒ん坊もにんげんだ、にんげんは誰でも自由になるけんりがあると言い出したもんだから、あんたも知つてるだろう、クエーカーのだんな衆で、自分の黒ん坊を自由にしてやつて、北部へ逃げる手伝いまでしてやる人が出てきたンだよ。それでもういまじゃ、クエーカーで奴隷を持つてると仲間から悪く言われて、それ

でも黒ん坊を手放さねえと、教会から破門されるっていうよ。ほんとに、その日のうちに破門だつて！」 彼女は大声になつて言つた。

「クエーカーの次にメソジストも善い人たちよ。十年か十一年前のことだけれど、メソジストがボルチモアで大会を開いて、おしめえに奴隷を持つのは神さまのおきてにそむいてる、自分をクリスチャンだというのは自分が奴隷になりたいとは思わない、とみんなの意見がまとまつた。だから黒ん坊を自由にする法律を作れと教会で大騒ぎして言わせるのは、たいていメソジストかクエーカーよ。バプチストや、ウォラー家のだんなたちが入つてる長老派は、まあそうなあ、あたしから見りゃ、どっちつかずだねえ。あの人たちは、自分の都合のいいように神さまをつくつておがむのよ。自由を尊ぶといつても、それは自分たちのことばかり。あとは、どうすれば良心のとがめを受けずに奴隷を持っていられるか、そればかり気にしてるのよ」

ベルが奴隷制度に反対する白人について熱弁を振つたにもかかわらず——そのなかにはだんなの新聞で読んだことがだいぶ入つていたのだが——、クンタがこれまでに聞いたトゥボプの意見は、いつもまさにその正反対のものばかりであつた。一七九二年の春から夏にかけて、だんなの馬車には州一番のオエラ方や、州一番の金持といった政治家、法律家、商